

## 教員養成における実践的音楽教育活動の具現化に向けた取り組み ードイツ・Jekits プロジェクトの事例からー

### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	トウヤマ アヤカ 藤山 あやか
所属等	滋賀文教短期大学 講師
プロフィール	愛媛大学教育学研究科音楽教育専攻を修了し、現在、滋賀文教短期大学子ども学科講師として、ピアノの実技指導や音楽表現など音楽に関わる科目を担当しています。専門分野は音楽教育学で、特に諸外国で行われている教育活動を参考に、幼少期の音楽活動の在り方について研究を進めています。 また、音楽を通じたアウトリーチ活動も積極的に行っており、これまでに、教育現場や社会福祉施設など様々な会場で演奏活動を行ってきました。昨年度には、平成 30 年度若手・女性研究者奨励金より助成を受け「日独親善交流音楽会」を企画するなど国際交流も視野に入れた活動を行っています。これからも、地域に根ざした教育活動を展開し、芸術文化の魅力を発信していきたいと思えます。

### 1. 研究の概要

ドイツの初等音楽教育において実施されている Jeki プロジェクト「Jedem Kind ein Instrument (どの子どもたちにも一つの楽器を)」を含めた音楽科教育のカリキュラムにおける現状と、その取り組みについて研究を行った。当該プロジェクトは、小学校を対象とした器楽学習であり、音楽学校の教師や演奏家などを講師として授業を運営している。このように、ドイツでは学校教育と地域社会が連携して行う音楽教育活動の支援体制が整っている。

本研究では、ドイツ連邦共和国・ハンブルク市内の基礎学校“Grundschule”で実施されている音楽教育の調査を基に、教員養成校における音楽教育活動の多様な展開のあり方を検討した。また、Jeki プロジェクトを念頭においた実践的な教育活動として、2018 年 10 月、ドイツ・ハンブルク市より音楽講師 2 名を招聘し、筆者が所属する滋賀文教短期大学と長浜市立杉野小・中学校が連携した日独親善交流音楽会を開催した。さらに、本学学生も企画・運営・実行に至るまで関与し、滋賀文教短期大学と包括連携協定を結ぶ滋賀県長浜市、学校教育現場の三者が連携して行う実践的教育活動として、学生の実践力育成および地域社会の活性化を目指すための指針を示した。

### 2. 研究の動機、目的

2017 年 10 月、筆者はドイツ・シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州アーレンスブルクを訪問し、ドイツの教育制度や初等音楽教育の実際について調査した。そこで、Jeki プロジェクトなど学校教育と地域社会と連携した取り組みや、当地域に存在する学校（幼稚園などを含む）施設を利用した公的な音楽学校“Musikschule”を視察し、講師のインタビューを行いつつながら幼少期における音楽活動について知見を深めた。

これらの活動内容を概観し、我が国の教員養成校での音楽活動にも取り入れられる部分があると考え、ドイツの幼少期の子どもたちを対象に実施している音楽活動のなかで、成果をあげている実践事例を参考に我が国における地域社会と連携して行う効果的な教育内容を考察した。

### 3. 研究の結果

#### (1) ドイツの課外音楽活動について

##### ①公教育機関の音楽学校 “Musikschule”

ドイツでは、幼少期から幅広い年齢層を対象に音楽教育を行う音楽学校が存在する。これらの多くは地方自治体からの公的支援を受け運営されており、場合によっては地域の公立学校の施設を無償あるいは安価で借用していることも多い。子どもたちは、それぞれの学校での通常授業が終わった後にこれらの音楽学校に通い、わずかな受講料で個人やグループレッスンを受講することができる。そのほかに、合唱、合奏、あるいはオーケストラなどそれぞれの状況に応じ、様々な音楽教育実践が行われている。

音楽学校の運用を概観するための調査の拠点として、音楽専門教育の中心であるオーケストラ活動を行っているアーレンスブルク音楽学校を中心に、その教育組織の全容、カリキュラム、指導方法について調査を行った。同音楽学校が位置するシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州では、音楽学校を運営するための施設借用費は無償であり、さらに、市よりの助成を受け、レッスン代や楽器借用費などの個人負担を低く抑え学びやすい環境を構築している。その運営および支援体制は学校教育施設と連携しながら行っており、音楽教育活動の充実を図っている。

##### ②キルヒェンムジークシューレ “Kirchenmusikschule”

地域で行う音楽活動として、教会が主催となって運営している音楽教室がある。今回は、ドイツ・プレーン市で実施している4～6歳児対象のレッスンを見学した。この音楽クラスは、教会に所属する家庭の子どもたちの教育を目的としており、教会の施設を無償で使用すると同時に、参加者も無償でレッスンを受講できるシステムとなっている。講師は、教会所属の音楽監督・オルガン奏者で職務として行っており、基本的に謝礼を受け取っていない。子どもたちは、簡易楽器を用いて簡単なリズムアンサンブル遊びや身体を動かす音楽あそび、また、リズムを読むソルフェージュの要素を持った活動など、30分程度のプログラムで多様な活動を展開していた。



写真1：簡易楽器を用いた音楽あそびの様子

#### (2) JeKi “Jedem Kind ein Instrument” (どの子どもたちにも一つの楽器を) の実際

2018年8月、現在62校の基礎学校で当該プロジェクトを採用しているハンブルク州の基礎学校を対象とし、担当教員への聞き取り調査およびハンブルク州立図書館での研究資料の収集など現地調査を行った。

ドイツは戦後の高度復興期より移民社会の背景を持っている国であり、とりわけ近年は、東欧諸国や中近東からの移民が増大し社会問題となっている。このような背景の中で、子どもたちが楽器を通じて異なる言語や文化の壁を越えて相互理解し、共存社会の形成の実現を目指すことを理念とした教育活動の一つとして JeKi が導入された。運用方法や授業内容について、① JeKi のカリキュラムに基づいた教科書および指導書を用いて、基本的には1～4年生まで通年を通して週1回の45分授業で実施されていること、②レッスンは2年生(7～8歳)より始まり、各楽器の専門家のもと10人程度のグループレッスンで実施していること、③使用する楽器はヴァイオリン、ギター、トランペット、リコーダー、打楽器など16の楽器が提示されており、どの楽器を選択するかはそれぞれの学校の裁量に委ねられていること、④各学校への楽器の購入、講師の費用面については、ほとんどが州の予算から計上され、これらの補助により無償でレッスンを受



写真2：西アフリカ起源の打楽器「ジャンベ」を用いた授業風景

けられることが明らかとなった。

### (3) 大学と地方自治体、学校教育現場など地域社会と連携して行う実践的な音楽教育の取り組み

ドイツの教育制度や初等音楽教育の在り方について、外部講師として招き授業を運営する JeKi をはじめとして成果をあげている音楽活動の実践例を参考に、教員養成校における音楽の教育内容について検討した。そこで、学生の教育実践力の育成に寄与するための取り組みとして、学校教育現場と連携して行う地域に根ざした実践的教育活動を実施した。

具体的には、2018年10月、長浜市立杉野小・中学校においてドイツより演奏家2名および国内演奏家を招聘し、音楽を通じたアウトリーチ活動として「日独親善交流音楽会」を企画した。当音楽会は、国内外の演奏家と滋賀文教短期大学子ども学科小学校教諭養成コースの学生が企画および運営に関与した。プログラム構成として、一部曲目で子どもたちとカスタネットや鈴など簡易楽器を用いての即興演奏や合唱で共演する「参加型」を重視した内容とした。さらに、滋賀県近江八幡市発祥の民族楽器「琵琶湖よし笛」を用いた曲目を取り入れ、地元で活動するよし笛の演奏グループをゲストとして招き共演し、音楽を通じた日独文化交流と地域における芸術文化の振興を図った。この実践では、地域社会の活性化および発展に寄与すると同時に、大学と地方自治体、地域の学校教育現場による有機的なつながりを持つ活動として成果を示すことができた。



写真3：滋賀夕刊「ドイツから、心に残る音楽」、2018年10月2日、夕刊1面。



写真4：「日独親善交流音楽会」プログラム

## 4. これからの展望

本研究より得た成果をもとに、JeKiを中心としたドイツの器楽学習のカリキュラムや指導法の現状について調査を続け、国内の器楽教育における適用への方向性を検討したい。

また、国際交流を視野に入れた音楽アウトリーチ活動を地域社会と連携した教育活動として積極的に行い、将来、保育士や幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生が音楽を通じた異文化交流を楽しみ、その経験を次世代に伝えられるような幅広い視野を持つ人材育成に努めたい。

## 5. 社会に対するメッセージ

日本国内においてもグローバル化が進む現代社会の中で、教育現場では共存社会の形成の実現を目指すグローバル化に対応した教育の展開が求められています。音楽は、「言葉を必要としない言語」として、その表現活動により一つのものを創り上げる協働作業を通して個々の多様な価値観を理解し合う手段として大きな可能性を持っています。

本奨励金より助成を受けて実施した「日独親善交流音楽会」では、小学生にとっては海外からの音楽家による生の音楽に触れる機会として、また、学生においては、演奏会の企画・運営・実施に至る過程の中で、海外の音楽家との交流を通じて多文化への理解を深める大変貴重な機会となりました。

また、本研究ではドイツの初等音楽教育について、今回の現地視察での授業見学や講師へのインタビューより、その理念について知見を深めることができ、今後の研究を推進する成果を得ることができました。今後も、教育実践につながる研究活動を行い、次代を担う子どもたちの可能性を最大限に引き出す音楽活動を展開していきたいと思えます。

この度は、本研究を遂行するにあたりご支援いただきました皆様に、深く感謝の意を表します。